

# 園長通信

イメージキャラクター

ふたふう

高槻双葉幼稚園50周年を記念して誕生しました。幼稚園で子どもたちを見守ってくれています！



2025.2.01

園長 岡部 祐輝

## ●●大会について考える

3学期はすべての学期の中で一番短くあっという間に終わる学期として学校教育の中ではとらえられています。気づけば早2月……。当園でも各学年、クラスが1年間の成長を振り返る時期にきています。

3学期は当園では、「成長展」が2月8日（土）に開催され、各クラスでの子どもたちの遊びの中にある学びや、一人一人の成長をたどる時間として、保護者の方との対話を大切に作る時間になればと考えています。

さて、3学期に入り、日常の保育の中では、年長の子どもたちを中心に、コマ回し、なわとび、ドッジボールなどをしている姿を見かけます。少しでもうまくなりたい、できるようになりたいと日々頑張っている子どもたちがいます。

日本の学校教育、幼児教育では、このように日々取り組んできたことを、「●●大会」として、勝負する機会を設けたり、自分自身の記録更新を目指す場を設けたりすることがあります。また大人になるにつれて、「選手権」、「競技大会」、「トーナメント」など「競う」、「勝敗が付く」環境に身を投じる機会が増えてくると考えます。

幼児の発達として、まだまだ俯瞰的に物事を捉えにくかったり、自分を客観視したりすることが難しい場合があります。「**メタ認知能力**」といわれる、いわゆる「自分自身の考えや行動を客観的にとらえ、理解する能力」は、大きくは小学校以降で伸びがみられてきます（※個人差があります）。

つまりメタ認知能力が十分に発達していない場合、目の前の「勝った」、「負けた」が過度に焦点化されたり、比較を繰り返すことで過度に比較する思考が高まってしまったりするなど、このような大会で大人が意図、ねらいとしている育ちとは異なる方向に進んでしまうことがあります。

スポーツなどの場合、一度の失敗や、失敗した際に合わせてネガティブな経験した場合（例：失敗をみんなに笑われ、その気持ちの折り合いをつけられない状況でおわってしまったなど）、「このスポーツ嫌い/やりたくない」と、一つのことがすべてに感じてしまう可能性があります。また、幼児教育は一人一人の発達の違いが特にある子どもたちです。その違いがある中で、一律の方法で参加させ、強制的に競う場に「立ちなさい」と指示することは、その発達の違いに応じたやりかたとは言えないことがあるのではないかと考えます。

このような議論をすると、過去に「手をつないでみんなと一緒にゴールテープを切る/1位はみんなです！🌞」といった教育が展開されていたというニュースを思い出した方もおられると思いますが、私の中ではその議論と一線を画しています。子どもたちの中には「**勝負をしたい**」ニーズをもっている子ども、**友達と一緒になら参加してみたい**と思う子ども、**自分のペースで楽しくやりたい**と思う子どもなど、様々なモチベーションやニーズがあります。しかし社会の目は、「**社会に出たら競争社会なのだから、小さいころから競争に慣れておいた方がいい**」というようなことが一定数あるように感じます。競争に慣れる経験を早くからしておけば、競争に耐えられるようになるのでしょうか？

## 挑戦する土台・基礎をはぐくむもの

幼児教育でまず大切なことは、「自分が周囲や社会から大切にされている、愛されている存在だと認識すること」と考えます。これは自己肯定感をはじめ、**セルフコンパッション**（≒私よく頑張ったねと自分を自分で認める感覚）や、**レジリエンス**（≒困難に立ち向かう、跳ね返す力）の礎となります。このような感覚を子どもが経験するためには、勝ち負けがすべてという「勝利至上主義」的な展開ではなく、勝ち負けだけではない価値観を子どもたちが経験することが求められます。例えば、リレーをしているとき、負けはしたが友達の応援を自分事のようにしている子どもの姿、何度も練習し、困難を打ち破ろうとしていた姿、仲間を励まし、落ち込んでいる子どもに声をかけチームとして頑張ろうとしていた姿などを周囲の大人が、その姿やプロセスに価値や意義を捉え、子どもと共有するということです。それらにスポットライトが当たるよう、私たち大人が注目し、その**取り組んだプロセスとそれらがなぜ素晴らしいのか、そしてこれからの何につながるのかなど、未来につながるイメージを子どもたちと感じられる雰囲気を作ることも大切**になります。

そして●●大会ですが、この方法も、「得意な子ども」と「あまり得意ではない子ども」、**双方の運動機会や実施するチャンスを同じように確保すること**を大切にしたいと思います。負けたらあとは何もできず、ただ全体の大会や取り組みが終わることを待つだけ、もしくは、応援をするという行為はあるが、自分はそのメニューや運動をやりたいのに、じっとすることを求められ、行うことができないといった展開になることが、どうしても●●大会という方法では起きてしまうことがあります。（※悪いことしかありませんという意味合いではありません。方法に配慮や工夫が必要ですよという意見です）

## 一人一人が肯定的に活動できる方法は何か

当園では年長の子どもたちが、本年度行う個人単位の大会形式のものは、「**エントリー制**」で行うこととしました。全員を一律勝負の舞台に強制的に上げるのではなく、本人の意向をふまえ、参加の仕方を選べるようにするというのです。エントリーをしなかった子どもたちは、大会に出て順位を決めるということではなく、昨日までの自分の記録に挑戦したり、その遊び自体を楽しむ時間にしたり、思い思いの形でその取り組みに関連することで自分のニーズを大切にすることができるよう、保育の中で工夫をしています。各自がなわとび、コマ回しなどに対して、それぞれのペース、ニーズで向き合うことのほうが、その活動に対して肯定的にトライしたり、自信をつけたり、楽しく参加したりすることができ、「**また次もやってみよう**」という思いにつながると考えます。

余談ですが私は学生時代、野球部に所属をしていました。私なりに努力はしましたが、結果はベンチメンバーにやっと（なんとか）入れるという形で終わりました。今の野球部の練習の仕方のスタンダードがどうなっているかはわかりませんが、当時の練習はレギュラーや下級生の次年度レギュラーになりそうなメンバーの練習量が多くあり、控えメンバーはおのずと練習量が少なくなりました。子どもだった私は、野球がしたくて野球部に入ったのに、野球ができない状況は正直なことを申しあげると面白くなかった記憶があります。そして、たくさん練習ができていたレギュラーメンバーがまぶしく、「ああ、自分はもうあんなふうにはなれないんだな」という大きな敗北感を味わった記憶があります。しかし、自身の経験的な財産として「チーム」で、ともに何かを成し遂げるために一丸となる経験ができたことも同時にありました。

このある種の「挫折した経験」は一見、その後にチャレンジすることを恐れるようになるのではないかとと思われる方もおられるかもしれませんが、私の場合はその後に、チャレンジや競争を避けるということには至りませんでした。それは、周囲から、「～をすると、あなたにはこんな良さがあるよ」とも素晴らしいね」など**他の良いところを認めてもらえる言葉をかけられたり、努力をしたことが実を結んだ経験をしたり、自分の行った行為が誰かの笑顔を作ることにつながる経験をしたり**したからです。それにより、「ああ、自分は野球は決してうまくなかったけど、～では頑張ることができたんだな。誰かの力になれるんだな」と俯瞰的に自分を捉えることができました。

しかし、このエピソードは中高生のころの話です。前述の通り幼児期の子どもたちの発達段階とは異なります。徐々に年齢が上昇するに伴い、競争を行う世界に入っていきますが、その土台を形成する幼児期では、**子ども達それぞれの「やってみよう」気持ちや、「やってよかったな」、「新しいことは挑戦すると楽しいし、いいことがあるな」などの感覚が高まるような保育展開や保育者の援助**を考えていきたいと思えます。

ぜひご家庭でも、「勝つ・負ける」の視点だけではなく、「**個人の内的な心の変化**」や「**どんな思いでトライしたか**」など、心の動きや過程についてもお話しいただき、成長した、よくなったことについては、「**どうしてうまくいったのかなあ？**」というように、**その要因を探り、今していることがこれからは活かせるんだ！**という自信を高めていただければ幸いです。

